

3つのロゲイニング： 有度山、箕面、石垣島

村越 真

主催団体の性格もイベントの特性も違う3つのロゲイニング大会が1月の末から3月にかけて開催された。そこにはオリエンテーリングとロゲイニングの今後を考えるヒントがいくつも見つけることができる。



トップアスリートから、こんな子ども連れの家族までが同一のフィールドで楽しめるのがロゲイニングの大きな魅力であるとともに、普及や強化面でも武器になりえる（有度山ロゲイニングにて）

有度山トレイル三昧

有度山トレイル三昧は、今年で3年目になるトレランとロゲイニングの複合イベントである。日本のアウトドア界は各種目の垣根が高すぎる。互いに垣根をとり払えばもっと愉しく安全になる。たとえば、速く走る体力があれば、登山での急激な状況の変化に対応できる。ナビゲーションができれば間違いなく行動できるとともに、地図が読めることで山の景観への関心も高まる。そんな考えから、トレイルランナーとナビゲーション・スポーツの愛好者がともに楽しめる場を提供したい。このイベントはそんな思いから生まれた。

初日のトレランミニレースの後には、招待選手の田島さんとパートナー千葉さんの好意で、参加者へのパークO体験会が行われ、10名ほどの参加があった。この数は、参加者の15分の1であると考え、決して少なくない。トレランからオリエンテーリングへの導入には、開拓の余地があると感じられる。

3年目にして実現した初日夜の交流会は、参加者の交流に役立つとともに、オリエンテーリングやロゲイニングをじっくり説明するいいチャンスとなった。翌日参加予定だった女性は、同じテーブルに座ったオリエンティアの熱弁に感化され、翌日のロゲイニング出場後、地元オリエンテーリングクラブへの入部を決めた。



トレイルランニングレースの後には、パークOの体験会が開かれた。パンダ！？も公園を走り回って、来園の子どもたちの人気をさらった。

2日目が有度山ロゲイニングである。昨年までの有度山全域が変わって、エリアが有度山東半分と三保半島にシフトした。サッカーの街、清水の次郎長、そして三保の松原。名所には事欠かない。山域でのナビゲーションを残しながら、町中での観光気分も味わえる欲張りなイベントを目指した。日本平のロープウェイや清水港の渡し船（現在でも工場労働者のために毎日数便が運行されている）も利用可というお楽しみもあった。

競技スポーツというよりも入門的な色彩が強い今回の有度山ロゲイニングでは、改めてロゲイニングと地域おこしの相性の良さを感じた。前述した著名なポイントはもちろん、徳富蘇峰が富士山の絶景を顕彰する詩碑や、羽衣に傾倒し、三保を憧れながら果たせず亡くなったプリマドンナの記念碑など、清水市民すら知らない名所がチェックポイントであったが、参加者の多くがそれを堪能できた一日であったに違いない。



「日本一富士山の映える街」清水で開かれた本大会はいたるところで富士山の眺めが楽しめるのも、人気の秘密の一つ。

厳寒の箕面ロゲイニング

日本列島全体が寒さと雪に見舞われた2月中旬、箕面にもトレインの奥はおよそ15cmの積雪があった。幸いだったのは大会当日の天候がよく、比較的暖かかったことだ。

2008年の全日本大会が開かれた箕面市萱野北小学校には、約180人の愛好者たちが集まった。大阪オリエンテーリングクラブの主催により全日本で使われたオリエンテーリングマップで行われるこの大会は、一人での競技参加も認められており、オリエンティアの比率も高かった。

その一方で、ロゲイニングシリーズの最終戦でもあり、各地のイベントで見る顔も多い。また女子マラソン指導者としても著名で、自らも大阪国際10年以上連続出場の経験を持つ佐藤光子さんも走る仲間を連れて参加されていた。

チェックポイントについては、O-mapを使いながらもロゲイニングのスタンダードを意識して、多くのポイントが道の分岐や名所等に置かれていた。オリエンティアとしては、もう少し骨のあるポイントがあると嬉しい。



「厳寒」と銘打たれた箕面は、その名に恥じない！？雪化粧となった。

シリーズ戦で最大の盛り上がりを見せたのは、家族部門であった。三重の宮崎ファミリー（ハムちゃん）は全10レースのうち9レースの参加である。上田ファミリー（Team Heart Gold）、静岡の高野ファミリー（チワワーズ）も8レースの参加である。彼らはいずれも小学生の子どもを連れての参加だが、「家族組」というほのぼのとしたカテゴリが不似合いなほどの真剣勝負ぶりだ。週末には家族でトレーニングをし、ナビゲーションの習得のためにオリエンテーリングにも参加している。箕面の得点によっては逆転もあるという激戦だった。

今回のシリーズ戦に破れたあるファミリーは、「やはりナビゲーションが重要」と考え、地元のオリエンテーリングクラブに入会を決めたほどだ。



シリーズ戦で大接戦を演じた家族組3チーム。左から上田ファミリー、高野ファミリー、宮崎ファミリー

石垣島ロゲイニング

ホールアース自然学校は受入数日本一を誇る自然教育組織である。その沖縄校の角田さんが、ご自身の興味でロゲイニングを体験したことが、今回の一連のイベントの発端となった。離島でのアウトドアイベントの可能性を探っていた同校の角田さんが、誰でも楽しめるとともにゲーム性も奥深さもあるロゲイニングに注目し、2008年秋に田島利佳、松澤俊行両氏の指導を受け、2009年2月に名護でのロゲイニング大会を開催した。

この大会自体は参加数が100名強であったが、地元メディアにも取り上げられ、今年は県のスポーツツーリズム助成金も受けて、首里（那覇）、名護、石垣という3つのロゲイニングを開催する運びとなった。特に11月に首里で行われた大会には約220人が参加し、ロゲイニングの間口の広さを検証する結果となった。

今回開催された石垣島は、沖縄県の離島であるが、県庁所在地の那覇から約350km。本土で言えば東京名古屋間の距離がある。参加者約100名、その8割が石垣島の住民である。那覇からですら飛行機で1時間の場所で、県外の参加が少なかったのはやむを得まい。むしろ80人近い八重山住民（竹富島、西表島含む）がよく集まったというべきであろう。

●前日講習会

地元の人には全くなじみのないスポーツのため、前日には参加者対象の無料説明・講習会が実施された。ホールアース沖縄校のスタッフがロゲイニングの概略を説明した後、私が講師役となり、ロゲイニングに使う1:25000地形図の基本や地図記号を説明するとともに、会場となった青少年の家周辺でのミニゲームを30分間で実施した。



こんな子どもたちが熱心に地図読みのお話を傾けてくれる。その成果は、翌日にさっそく表れ、家族組で入賞につながる

●イベント

レースは石垣島（一周約180km）の南部を使い、1:25000地形図A3で2枚分のエリアを使って行われた。折しも大会前日3月5日から珊瑚ウィークが開催されており、その会場の白保地区も含んだため、急遽、同地区へのバス路線も利用可能となった。それでも60個を超えるチェックポイントは島南部に満遍なくばらまかれ、市街地の観光名所から郊外の史跡まで多様なポイントを、時には1レグ3kmも走りながらのイベントは、トップ選手から、家族組まで、誰にとっても楽しめるものだったに違いない。

本州からのトップ選手も招かれた。「ロゲイニングの帝王」こと柳下大選手は、トレイルランニング仲間の松永紘明選手と参加し、バスも使わずに6時間で56kmを走りきり、他のチームのトップが700点台のところを1400点台とダブルスコアの実力を見せつけた。表彰対象外であったものの、盛んな拍手と、ルート紹介での壮大なプランニングと飽くなき得点の追求はため息を誘った。

ほとんどの人が初心者の本大会では

あったが、中には普段からエコツアーなどのガイド業を営む若い人たちもあり、家族組とはまた違ったロゲイニングへの感想が聞かれた。

また、地元青年会の協力で、スタートとゴール時は、地元の民謡や太鼓での見送り、出迎えもあり、本州からの参加者にとっては、つかの間の石垣情緒を楽しむことができた



招待選手の柳下・松永両選手のチームは1400点のスコアと大胆なルートプランで、ロゲイニングの奥深さを参加者に見せつけた。

3つのロゲイニングに関わって

3つのロゲイニング大会を通して、その現状と可能性、同時にオリエンテーリングの世界から見た今後の課題についてまとめてみたい。

●現状と可能性

日本オリエンテーリング協会でも、ナビゲーションをコアとするスポーツであるロゲイニングに注目し、2008年からはシリーズ戦をとりまとめている。2009年には8大会でのべ1500名の参加があった。またシリーズ戦には入っていない小さなレースも数多く行われている。現在のアウトドア界における関心の高まりを見ると、潜在的な開催ニーズはかなり多いと推測される。

オリエンテーリングとの参加者層の違いも興味深い。オリエンテーリングは全力でゴールを目指すスポーツだが、ロゲイニングは登山のように、ある程度の装備を携えるアウトドア活動である。ザックやウェア、そしてザックの中にいれる食料その他、様々なものが必要だ。それがファッション性にもつながっており、障害になるというよりも、むしろ「お洒落感」を生み出している。こうしたロゲイニングの特性が、山ガールやそれに近い志向を持った人たちにも間口を広げているように感じられる。有度山のロゲイニングでは、トレイルランナーの方から、「正直めんどくさいスポーツと思っていたが、これまで出たどの（トレランやマラソンの）レースよりも面白かった」という感想を聞いた。ランナーたちの参加

が多いのも、ロゲイニングの特徴だ。

ロゲイニングの持つこれらの特徴が、これまでオリエンテーリングを敬遠していた層に、「何か面白いかも」あるいは「自分にもできるかも」と思わせ、参加者層を多様なものにしている。

地域イベントやスポーツツーリズムとの相性のよさもロゲイニングの特徴である。シリーズ戦のように基本的には競技色の強いものの中にも、そのエリアの名所や史跡などを織り込んだものが見られる。特に奥武蔵から始まったフォトロゲイニング形式では、名所・史跡でチーム写真を撮る。この行為自体が、旅行やハイキングの延長線上で捉えやすい。

3時間から6時間、たっぷり楽しむというのも、遠くからの参加者を引き寄せやすい特性であるとともに、アスレティック性とレクリエーション性を無理なく同居させる要因となっている。



山ガールから、アウトドア派まで、間口の広さを見せるロゲイニングは、ナビゲーション・スポーツ普及のヒントを与えてくれる。



市街地でのロゲイニングは時にはこんな商店街を通ることも。地域おこしのアクティビティとして注目を集める所以だ。

●課題

オリエンテーリング関係者と議論していると、「なぜスコアオリエンテーリングではなくて、ロゲイニングなのか？」とか、「オリエンテーリング協会なのにロゲイニングの普及を図るのはなぜか？」といった疑問を指摘される。

旧来からあったものが新しい名前によって、新たな人気を獲得する現象はマーケティングの分野では特殊な話ではないとは言え、同種のものが別の名称で呼ばれていることは、混乱の元になる。名称や様々な実施スタイルの整理は、今後の普及の大きな課題であろう。

併せて、オリエンテーリングとの関係を明確にする必要性もある。両者の違いを意識しつつ、入門者のためにはロゲイニング、そこからさらに競技性を強めたい場合にはオリエンテーリングといった、種目間の役割分担も必要になるだろう。

1970年代の初頭には、「オリエンテーリング公害」という言葉が生まれたほど、急増した当時のオリエンテーリング愛好者と地元との間にはコンフリクトがあった。同じようなことは現在トレイルランニングでも発生しているが、ロゲイニングも普及につれて同じような問題が発生する可能性は高い。特にロゲイニングが市街地でも行われている現状を考えると、一般通行者との関係や警察による規制など、自然の中とはまた違ったコンフリクトが生じる可能性がある。

また、オリエンテーリングよりは大きなスケールで開催されるロゲイニングには、安全対策上も課題は少なくない。シリーズ戦でも骨折やはちの事故が発生している。発生する事故はオリエンテーリングとは大差なくとも、車道まで遠く離れた場所でのけが人をどのように搬送するかなど、主催者が考えるべき問題は少なくない。

●お終いに

私は、よく「ジョギングは誰にでも楽しめるが、3000m競走は誰もが楽しめる訳ではない。」という例を引き合いに出し、オリエンテーリングとロゲイニング（あるいはその他のナビゲーションスポーツ）のあるべく関係性について話すことがある。この例が100%完全なアナロジーではないにしても、オリエンテーリングの置かれている現状と今後を考える上では意外と有効なのではないだろうか。ロゲイニングを誰にでも気軽に取掛かることができる「ジョギング」とすれば、オリエンテーリングは「3000m競走」と言える。

誰でも走りきれぬ距離だが、かといって3000mを走るだけでは達成感を得られにくい。3000mの楽しみはハードなトレーニングやそれによる自分の変化の中にある。さらにそれを楽しめる人も多数派とは思えない。しかし、その背後には「ジョギング」という広大なスポーツ文化とそれに魅力を感じる人がいる。

ロゲイニングの世界選手権に出た時にも感じたことなのだが、ロゲイニングは、オリエンテーリングの背後にどのようなスポーツ文化を構築すべきかという問いを投げかけている。

(村越 真)